

日本は先進国であるはずだが

すが 須賀 つとむ 努

コラムニスト・アジアウオッチャー

アジアの旅と並行して、日本の旅も続けている。今回は新幹線や特急を使わないで、在来線とバスに乗り、東京から佐賀まで行って見た。そこで出会った外国人にも話を聞いてみると、そこからは日本の現状が少し見えてきた。

日本らしさが感じられる伊勢神宮

新宿から夜行バスに乗ると、翌朝7時に伊勢神宮、外宮の前にバスが停まる。台風が過ぎ去った快晴の朝、お参りが出来るのは何とも贅沢だった。朝ごはんを頂き、内宮へ行ってみると、そこには既に中国人団体観光客の姿があった。名古屋に泊り、これから関西方面へと抜けていく一団だった。

彼らに話を聞くと『神社は日本らしさが感じられる場所だ』と言い、『特別な体験』を楽しんでいるとのことだった。寺院は中国にも沢山あるが、神社は日本的だということである。中国人というと『爆買い』だけが話題となるようだが、彼らが日本に求めているのは、物ばかりではない。

因みに昨今の上海株の暴落などで、『爆買い中国人は減少するのか』という質問をよく受けるが、

『中国は広く、いまだに発展している地域もあり、日本へ来る観光客の数は、政治的理由でもない限り、減ることは考え難い。またその消費力が

落ちることもない』と答えている。日本人は日本でのバブル崩壊を念頭に話を進めがちだが、中国は経済が減速したとはいえ、まだ発展している国である。

ローカルルールが多過ぎる日本

先日ミャンマー国内を列車で55時間旅した経験から、日本国内の鉄道事情を知りたくて、名古屋から広島まで、敢えて新幹線や特急に乗らず、在来線で行って見た。合計約9時間、乗換回数6回。

途中で出会ったフランス人に聞いてみると『日本の列車はどの区間でも、本当にきれいだ』と言い、香港人は『ローカル電車の車両には短い区間でも必ずトイレが付いていて驚いた』と答え、台湾人は『節電や車内温度調節のため、駅に着いても、ドアが自動で開かないのは面白かった』と笑う。基本的に地元の人が乗り降りするローカル電車。外国人にとってはここにも日本を知る手掛かりがあり、鉄道オタクでなくとも、一度はゆっくりと車窓を眺める旅をしたいと思うようだ。

尚、名古屋でSuicaを使ってJRに乗車、広島で改札を出ようとしたところ、カードがエラーとなった。駅員から『エリアを跨いでは使えない』と怒られたが、恐らく外国人であれば、同じカードが名古屋でも広島でも使えるのに、エリアを跨ぐと使えないことは理解できないだろう。また、あるタイ人は『日本は科学先進国だと思ってきたが、Wi-Fi環境などを見ても、そうとばかりは言えないことが分かった』とつぶやいたのが印象的。

駅員は『全国にそんな機械を設置する余裕などな



写真1 宮島 日本らしさを感じさせる厳島神社



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

撮影：佐渡多真子



い』と言い切ったが、顧客目線で考えれば、外国人のゴールデンルートと言われる、東京、京都、広島など主要駅では1台でも使える機械を導入すればよいのだが。因みに広島エリア内では使えると言われたSuicaだが、翌日宮島へ行くJRフェリーに乗船したが使えなかった。日本はローカルルールが多過ぎる、もっとシンプルにして欲しいと願う。

老舗の挑戦

関門海峡のトンネルをスルッと越えると、そこは北九州。小倉駅に初めて降り立つ。老舗のお茶屋を訪問すると、その店先では台湾の若い女性たちが、抹茶アイスを食べながら、記念写真を撮っていた。実はこのお店、台湾に3店舗を展開し、台湾人にはお馴染みだったのだ。

『老舗の看板に甘えてはダメ』という社長、10年前から海外展開を考え、シンガポールや上海にも出店、今や海外での売上げが日本での落ち込みを補っているという。これからのキーワードは、ずばり『海外』『ネット』『カフェ』『スイーツ』だと言い切る。確かに、筆者も日本の和菓子屋、お茶屋はもっと気楽に喫茶できるスペースを提供すべきだと思っている。実際、外国人観光客はそんな場所があれば喜んで飲んだり、食べたりしている。おまけに『お茶は無料』という習慣もないので、お茶に料金を課すことも可能だ。



写真2 老舗茶屋で抹茶アイスを食べる台湾人

日本のお茶といえば、外国人には茶道のイメージが強く、京都などで畳に正座して抹茶を頂く機会があるが、あれは日本的なパフォーマンスとして一度体験するのは良いが、今の日本を知ってもらうには、普通の煎茶やほうじ茶を飲んでもらうのも良いのではないかと思う。

限界集落のインフラ

博多駅から電車で1時間、羽犬塚という駅からローカルバスに揺られて1時間半、高級玉露などで有名な八女茶の産地に行ってみた。『電車とバスで行く』とお茶屋に告げるとかなり驚かれたが、その理由はバスに乗車して分かった。一日に数本しかないバス、そこには殆ど乗客の姿はなかった。時折、地元の老人が乗り込んでくるが、すぐに下りてしまう。他人事ながら、バスの経営は大丈夫かと心配になる。

茶産地は山の中にあるケースが多く、商店がなくなる、交通手段がなくなる、いわゆる限界集落を期せずして見に行くことになる。先日の台風でこの村も3日停電、土砂崩れなどの被害もあった。最近の日本では自然災害による土砂崩れ、家屋の倒壊などが多く見られるが、これまで国を支えてきたインフラが限界に来ていて、修理などの費用が捻出できないなど、日本の国力低下がそこかしこに噴出しているように見える、とある外国人は嘆いていた。

後継者がいない、という深刻な問題もあり、農業の耕作放棄地も増えている。そんな中、若手茶農家、お茶屋の中には、自立して地域に根差して頑張っている人々も多く、彼らこそが今後の日本の光だな、と思えてならないが、その前途は険しい。